

『母と息子の
13階段』

林田
麻美

わが子の罪を被り死刑になろうとする母が、その息子から思わぬ仕打ちを受けることで、自分自身の本当の罪と向き合うことになる。

自分の人生に行き詰まり、息子への献身に逃げた、ある一人の女・律子。対照的に、夫の誠一は市政で名を挙げ躍進していく。律子は息子・廉人に夢を託して音楽指導に励むが、非協力的な誠一とは諍いが絶えない。廉人はその度に傷つく母を見て「自分のせいで……」と心を痛めていた。

ある時、誠一の付き合いで一家は地域のお花見に参加する。必死に夫婦円満を装い、周囲に愛想を振りまく律子。廉人はそんな母を不憫に思い、仕出しの甘酒の鍋にこっそりと危険薬物（律子がお守りとして隠し持っていた）を混入。3人の死者を出す大事件となる。律子は心中を図るが思い止まり、廉人と約束を交わし、身代わりとなって捕まった。

残された父子は世間の目を避け、過疎地に移住。廉人はその地域の公立中学に進学し、母との約束を果たすべく体育館のピアノで練習を続けた。が、彼には楽譜が読めないという弱点が……そこに現れる同級生の楓香。廉人と同じく母の影響でピアノに熟達した彼女は、廉人の楽譜の通訳となる。

アクリル板越しに再会する母子。廉人はテーブルの上で指を動かし、練習の成果を見せる。しかし律子の顔は曇る。「なんか、変な癖ついてる……」

律子は廉人の中学の音楽教師に手紙を出す。教師はその「子を想う母」の健気さに共鳴し、律子の目論み通りに廉人を導いた。そうして廉人は母が果たせなかった夢への階段を駆け上っていき、律子はそんな息子を誇りに堂々と死刑判決を受けるのだった。

コンクールで優勝し、良くも悪くも注目を浴びる廉人。「死刑囚の息子」というしがらみを断ち切り大成してほしい、そんな周囲の計らいで留学話が浮上。これを知った律子は一時不安に駆られるも、控訴するよう懇願する廉人を見て安心し、「このまま死刑を受け入れてあなたを応援する」と気丈に振る舞う。そんな母の自己犠牲に耐えかね精神を病んでいく廉人だったが、ある時、合わせ鏡のような楓香を見て自身の病理を知る。そして母の誕生日に、廉人は自分が獲ったトロフィーを捧げて決別宣言をする。息子に捨てられる……焦燥した律子は、公の場で息子への愛を証明すべく、控訴に踏み切る。

控訴審。証言台で息子への想いを語る律子。それを見た廉人の精神は決壊し、傍聴席で痙攣を起こして卒倒。(体は)何ともないと診断されるが、これがかえって彼には堪えた。廉人は、自分の罪を、そして人生を母から奪還すべく、情状証人として立った法廷で真実を述べる。しかし律子は尚も「優しい子だから私を庇っている」と主張して譲らない。ならば……「証明します」廉人はその場で母の首を絞めた。すると律子は紅潮した顔に笑みを浮かべる。もう触れられないと思っていた息子の手の温もりに恍惚としながら、息子の成長を実感し、自身の罪を悟ったのだ。主文、被告人は無罪——律子はそうして、愛する息子の人生を降り、自らの些末な人生を一人歩み出した。

登場人物

原律子（32・46）……一児の母。音楽家。

原廉人（0・14）……律子の息子。小く中学生。

原誠一（40・54）……律子の夫。教師く市議。

内山美樹（45・47）……律子の弁護士。

関楓香（13・14）……廉人の中学の同級生。

飯村（41）……音楽プロダクション営業。

岩槻（42）……律子の旧友。バー店主。

裕翔（14）……廉人の中学の同級生。

皆川（29）……廉人の中学の音楽教師。

産婦人科医／看護師／助産師

誠一の支援者／町内会の人々

記者／カメラマン／リポーター

中学生／保護者

裁判長／検察官／刑務官／書記官

刑事／警察官

河原で遊ぶ母／子

○真黒い画面

くぐもった男の音がする。

男の声「先日のコンペの結果なのですが、残念ながら今回は……」

○マンション・高層階のベランダ

耳からスマホを離す原律子（32）。

男の声「――また何かありましたら是非とも」

ピッ 留守電の再生を終了する律子。

ぼんやり階下を見下ろすと、忙しそうに道を行き交う人々が目につく。

律子、慥然として溜息をつき、タバコを出して一本啜え、ライターの火を点けると、その視界に、ゆっくりとしたペースで道を歩く女性の姿が……妊婦のようだ。律子、しばし逡巡し、ライターを消す。

○産婦人科・内診室

ふー…… 息を吐く律子。

婦人科の検診台に横たわっている。下腹部から先はカーテンに遮られて見えない。看護師の声「そのままゆっくり息を吐いて――」

○同・診察室

モニターに映し出されたエコー画像を見つめる律子。

医師「おめでとうございます。（画像の中の小さな黒い影を指し）今はまだ見えませんがこの袋の中に新しい命が――」

ツ…… 律子の頬を伝う一筋の涙。

○マンションの一室・リビング

ヘッドホンをしてPCデスクに向かう律子。大きな腹が机につかえている。

壁のカレンダーには黒色で「39週検診 15時」¹⁵、翌同じ曜日に「予定日」の文字。

その間に赤色で「打ち合わせ」とある。今、PCに表示されている時刻は14:29。律子、小さく溜息をついてデータを保存し、ポータブルプレイヤーに移す。

○病院の送迎バスの中

数名の妊婦がいるバスの車内。中には夫や母親に付き添われている者も。

リリリーン リリリーン

車内の和やかな空気を破る着信音。

律子、スマホを取り出し電話に出る。

律子「（口元を覆い）はい、今夜中には……いえ、私がやりたくてやってることですから」

○産婦人科・検査室

腹に太いバンドを巻き付けられる律子。

看護師「苦しくないですか？」

律子「はい」

看護師「（微笑み）じゃあ少しかかりますけど、リラックスして過ごしてくださいね。生まれたらもうそんな時間ないですからね」

カーテンを閉めて出て行く。

律子、カバンを漁り、ポータブルプレイ

ヤーとメモ帳を取り出す。

× × ×

イヤホンをして音源を繰り返し聴き、気になるところをメモしていく律子。

何やらカーテンの外が騒がしいが、律子は自分の仕事に夢中で気づかない。

と、カーテンがザッと開けられ、医師が律子の腹のバンドを押さえつつモニターを見て何か言う。

律子「（左耳のイヤホンを外し）え？」

医師「赤ちゃんの心拍が落ちています。（律子にモニターを見せ）通常120ほどなんです、ここ数分60を切っています」

律子「（動揺し）え？」

医師、律子の腹を揺すりながらモニターを見て、

医師「ちよっと四つん這いになれますか」

動転しつつ四つん這いになる律子。

その腹を揺する医師。

律子の右耳からイヤホンが外れ、ポータブルプレイヤーが床に叩きつけられる。

音漏れする調子外れなメロデー……
モニターの心拍数がさらに低下する。

○中学校・教室（夕方）

ブルーブルーブルー 携帯のバイブ音。
三者面談中の中学教師・原誠一（40）。
胸ポケットの上から携帯のボタンを押し、
バイブ音を消す。

保護者「本当に親身になっていただいて」

誠一「いやいや、矢野君はクラスのムードメーカーで、いつもこちらが助けられていて」
保護者「そんな、そんな。ただのお調子者で。
それより、うちの父が先生のお爺様のことよく話すんですよ。本当にいい市長さんだったって」

誠一「いやいや、恐縮です……」

胸ポケットの中で尚も明滅する携帯の光。

○産婦人科・手術室（夕方）

律子の目に映り込む、無数の白い光。
手術台の上に仰向けになっている律子。

やがて、その体がブルンと揺れ……

オギャー オギャー オギャー

律子「！（両目からボロリと涙が落ちる）」

『こんにちは赤ちゃん』のオルゴール音が流れる中、助産師が皴くちやの赤子・廉人（0）を律子と対面させる。

律子「ありがとうございます……」

と、その顔を医師が覗き込み、何か言う。
律子の耳から音が消え、目の光も消える。

○タイトル

『母と息子の13階段』

○ファミレス・ドリンクバー

どろりとした白い液体が、透明なサーバーの中で絶えずかき混ぜられている。

コップに手を伸ばす律子（34）。

男の子の声「やる！ やる！」

足元を見下ろす律子。廉人（2）がコッ

プを掲げて背伸びをしている。
律子「もうー、こぼさないでよー」

と廉人を抱き上げ、自分で注がせてやる。
廉人、ギリギリのところまでピタツと止め、

廉人「カンパイ！」

とがぶ飲みし、プハーと言う。

律子、白い口髭を蓄えた廉人を見て、

律子「いっちょまえ、いっちょまえ」

と笑って床に下ろす。

そこへスーツ姿の男が入店してくる。

気づいて会釈する律子。

○同・窓際の席

子供用の椅子に廉人、その隣に律子、向
かに飯村（41）が座っている。

飯村「（廉人をまじまじ見て）やーしかし、も
うこんなに大きく……」

廉人、シェイクを飲んで白い口髭を蓄え、

廉人「いっちょまえ！」

ハハハと笑う飯村。

律子、苦笑して廉人の口周りを拭い、コ
ップにストローを挿す。

飯村「（微笑ましく見つつ）で、ですね、」
とカバンから資料を取り出す。

× × ×
ブクブクブク…… 泡立つシェイク。

廉人がストローに息を吹き入れている。

律子、読んでいた資料から目を離し、

律子「……スーパールのBGM？」

飯村「ええ、まあ、ご経歴を考えたら、ちょ
っと申し訳ない案件ではあります……」

律子「……」

飯村「原さんの才能、僕は本当に買ってるん
です。育児も大変でしょうけど、是非こう
いうところから一歩ずつでも……」

律子「（苦笑し）一歩ずつ……。そうやって這
い上がってきた結果がこれってことです」

飯村「（困り顔で）や、まあ、ええと……」

律子「少し考えさせてください」

×

×

×

窓の外を眺める律子。店を出た飯村が電話をかけているのが見える。
と、眼前にコップが差し出される。
廉人「おかわり！」

○同・ドリンクバー

ミルクシェイクをコップに注ぐ律子。
店内に響く幼児の叫び声……座席で一人、子供用の椅子に固定されたままの廉人が「自分でやる！」と駄々をこねている。
周囲の客の視線が律子の背に集中する。
シェイクを注ぎ終え、しばし固まる律子。
ツ……コップの結露が滴る。

○マンションの一室・リビング（夜）

よく冷えたビールを飲む誠一（42）。
ソファに腰掛け、テーブルの上に広げられた家の図面を眺めている。
カチャッ 律子が入ってくる。

誠一「（顔を上げ）寝た？」

律子、頷き、横に腰掛ける。

誠一「おつかれさん」

と空いているグラスにビールを注ぐと、
また図面に目を落とす。

誠一「（二階の一室を指さし）廉人の部屋にするなら、やっぱここかな？」

律子「（ウンウンと頷き）いいと思う」

誠一「日当たりも良さげだしな。あと……」

律子「（一階の広い部屋の一角を指さし）ここ、ピアノ置いていい？」

誠一「え？」

律子「実家にあるやつ。電子ピアノだと、なんか調子出なくて」

誠一「あ、そう。いいんじゃない？」

律子「ありがと」

と微笑みビールを飲む。

誠一「……律子、」

律子「ん？」

誠一「俺やっぱり、次の市議選、出ようかと思っただけど」

律子「……え？」

誠一「うちも正式にこの地に根を下ろすわけだし、そろそろそういう時かなって」

律子「だって興味ないって……。廉人デキた時、二人で普通に、地道にやっつこうって決めたよね？ だから私……」

誠一「いや、そうなんだけど、もう随分前から皆が期待してくれてて」

律子「皆って？ 私は何？」

誠一「だから律子にも応援してほしくて」

律子「……わかった。私働く。選挙お金かかるもんね？ そんなんで廉人の将来潰したくないから」

誠一「いや、そういう話じゃ……。金の心配はしなくていいよ。親も支援してくれるって言うし。俺はただ律子に」

律子「（被せて）うちの問題でしょ」

○同・ベランダ（夜）

スマホで電話をかける律子。

律子「あ、お世話になっております。原です。夜分にすみません……。あの、先日のお話なんです……。え？……。え？……。え？」

○同・リビング（日替わり）

名刺の束を置き、片っ端から電話をかけていく律子。その傍らで廉人が玩具の電話を耳に当てヘコヘコ頭を下げている。

次の名刺を取り、また電話をかける律子。

律子「あ、いつもお世話になって」

アナウンス「お客様がおかけになった番号は現在使われておりません」

電話を切り、ソファに投げ出す律子。

×

×

×

新聞を広げ、フムフムと首を振る廉人。

その隣で地域の求人チラシを眺める律子。

○託児所・内（夕方）

ビヤーンと泣き、律子にしがみつく廉人。

律子「大丈夫だよ？ 絶対迎えに来るから。」

ガチャッ 酔い潰れた誠一が帰宅。
そのままドタバタとトイレへ駆け込む。

○同・廊下（早朝）

パジャマ姿の律子が寝室から出てくる。
オエエツ…… トイレから響く嘔吐音。
嫌悪の目をそちらへ向ける律子。

○同・リビング（早朝）

ドサツとソファに倒れ込む誠一。
コップに水を汲んで持ってくる律子。

誠一「（へこへこし）あ、どーもどーも」

呆れて寝室へ戻ろうとする律子。

誠一、その手を掴んで引き寄せ、

誠一「ちよ、律子さん、律子さん」

手を振り解こうとする律子。

誠一「ちよちよ、いいからここ座って」

と半身を起こし、ソファを半分空ける。

溜息をついて座る律子。

誠一「はい、ね。晴れて立派な議員夫人様で
ございますよ。だからね、もうパートとか
だいじょーぶ！ 苦労様でございました」

と仰々しく頭を下げる。

律子、それを見つめ――バシヤッ！

コップの水を誠一の頭にかけた。

誠一「（顔を上げ）！」

席を立ち、出て行くこうとする律子。

誠一「おい！」

鬼の形相で律子の腕をガシツと掴む。

と、カチャッ 廉人（4）が駆け込んで
きて、二人の間に割って入り、小さな拳
で誠一の脚をパタパタと叩く。

誠一「（見下ろし）……」

律子「（しゃがみ）ごめんね、何でもないの。

お母さんと一緒にねんねしよ？ ね？」

と出口へ促そうとする。

誠一「（その律子の背に）わかるよ？ 久々に
外で働いて、気晴らしになってるんだらう。
けど俺の立場も少しは考えてほしいんだよ。
せめて市営の保育所使うとか」

律子「(背を向けたまま) そういうところじゃ、その時間帯無理だから」

誠一「なら別のパート探せばいいよ。見つからないようなら俺が口利くし」

律子「私だつて……、(見向き) 私だつてそれなりに必要とされてるの！ そんな簡単に辞められないって！」

廉人が驚き、わっと泣き出す。

誠一「(不憫に見つつ) わかった。そしたら次からうちの母親に預けよう。頼んどくから」
いっそう激しく泣く廉人。

律子、口を噤んでしやがみ、廉人を抱きすくめる。

律子「……私のわががまね。やめる」

○原家・リビング

新築の家に運び込まれる古いピアノ。

壁掛け時計の秒針が時を刻む――

×

×

×

――淡々とリズムを刻むメトロノーム。それに従う流暢なピアノの音色。

ピアノの上には、トロフィーや賞状などが並べられている。

弾き終え、隣を見上げる廉人(10)。

律子(42)、廉人の手に自分の手を重ね、微笑みかける。

○同(夜)

疲れた顔で二人掛けソファにどっかりと座る誠一(51)。

律子がやって来て誠一にビールを出し、角の一人掛けソファに浅めに腰掛ける。

律子「仕事、順調？」

誠一「え？ まあ……」

律子「次も出るの？」

誠一「や、うん……実はさ、」

律子「(被せて) 廉人、××音大附属受験させようかと思うんだけど」

誠一「は？」

律子「あなたの立場上っていうのはわかる。」

でももう十分信頼あるでしょ？ 前回だって余裕だったんだし」

誠一「や、だから今回は、」

律子「お願い、少しは協力して」

誠一「待ってよ、だから、」

律子「(被せて)あの子の人生が懸かっているの。

(立ち上がってピアノの上のトロフィー類を指し)誰にでもできることじゃない」

誠一「(しびれを切らし)俺の話も聞けよ！

廉人廉人廉人廉人！ お前は、俺の妻でもあるんだよ！」

律子「……」

誠一「ごめん。言い過ぎたけど、俺今回は、」

律子「私、あなたのために生きてるんじゃない。協力してくれないなら、私一人で廉人育てたっていい」

誠一「は？…… お前一人で何ができるの？ それこそ受験どころじゃなくなるだろう」

律子「……(充血した目で睨みつける)」

誠一「俺だって父親だ、廉人のことは考える。考えてるから、今苦勞させないように、将来道に迷わせないようにって、必死で頑張ってるだろう」

律子「そういうのもういい加減にしてよ！

自分のためでしょうよ、何もかも！」

誠一「お前こそそうだろう！ 廉人に自分の夢押し付けて！ 音楽なんかでメシが食えないのはお前が誰よりわかってるだろう！」

律子、衝動的にトロフィーを一つ取って振りかぶる。空中で震えるその手……

○同・玄関(夜)

玄関で過呼吸を起している廉人。

誠一に介抱され、次第に落ち着く。

誠一「ちゃんと帰って来るから寝よう？」

廉人「……僕のせいだよね」

誠一「お父さんのせいだから。な？」

と廉人を立ち上がらせようとする。が、廉人は頑として動かない。

○車の中（夜）

赤信号で停まる車。運転席に律子。
スマホを出し、電話帳をスクロールする。
その親指がある所でピタリと止まる。

○ジャズバー・内（夜）

薄暗い店内。客はボックス席でいちやつ
く訳ありげな中年カップルのみ。

カウンター席に着いている律子。

店主・岩槻（42）が烏龍茶を出し、

岩槻「泊まってきや飲めんに」

律子「（笑い）安心するわー、相変わらずで」

岩槻「（タバコを啜え）相変わらずはそっちっ
しよ。思わせぶりで」

言いつつ、律子にタバコを差し出す。

律子「（首を横に振り）息子が呼吸器弱くて」

岩槻「あんら、つまらない女になっちゃって」

とカウンターから出てきて隣に座る。

律子「（軽く躲し）女ですらもうないよ。（店

内を見渡し）いいお店じゃん」

岩槻「お、厭味ったらしいところはご健在で」

律子「本気で言ってるよ。（バンドセットを見
て）音楽捨ててないんだもん、偉い」

岩槻「（頭をもたせかけ）いーこいーこしてー」

そのおでこをペシッと叩く律子。

岩槻「けどこれは副業。大赤字」

言いつつポケットから粉末の入った袋を
取り出し、テーブルに放る。

岩槻「本業。魂売っちゃった」

律子「……」

岩槻「いやいや、グレイゾーンのやつよ？」

と律子に耳打ちする。

律子「それこないだ人死んだ……」

岩槻「酒でも何でも飲み過ぎりゃ死ぬからね。

ど？ 軽く。ヤなことみーんなファッ！」

律子「（首を横に振り）息子が待ってるから。

いつもの母ちゃんのまま帰らないと」

岩槻「なんなのもう。のろけに来たわけ？」

律子「（曖昧に首を傾げて笑い）かな。なんか

幸せすぎて息が詰まっちゃって」

汗を滲ませドラムを叩いている律子。
岩槻はカウンター内で後片付けをしなが
ら律子の相手をしている。

岩槻「へえ。椎野はもつとぶっ飛んだヤツ選
ぶと思ってた。俺アピリ方間違ってたわー」
律子「淡々とリズムを刻みつつ」アンタみた
いなのはっかだったから、ただまともって
だけで魅力的に見えたわけですよ」

岩槻「あ、俺のせい？」

律子「(笑い) せいせい。(真顔で) でも間違
ってなかったと思ってる。あの人とじゃな
かったら、廉人は生まれてないんだし」

岩槻、頷きつつ小首を傾げる。

律子「何？」

岩槻「や…、その理屈、なんだかさ？」

ドラムを叩く律子の手が止まる。

○同・外（夜明け前）

店の前で律子を見送る岩槻。

岩槻「息子もいけどき、自分大事にしなよ。

いい女なんだから、せっかく」

律子、笑いながら泣けてきて顔を覆う。

律子をそっと抱き寄せる岩槻。

律子「(呟く) あれ、やっぱり貰っていい？」

岩槻「あれって…」

律子「あれ。致死量」

岩槻「…」

律子、体を離して気丈に笑い、

律子「大丈夫。お守りにしたいだけ」

岩槻「…：…そいや、まだだったね。結婚祝い」

○原家・玄関（早朝）

律子が帰宅すると廉人が縋りついてくる。

廉人「ごめんなさい、ごめんなさい…」

律子「なんであなたが…」

と廉人をきつく抱きしめる。

○同・ベランダ

快晴の空の下、洗濯物を干す律子。

目を開ける律子。

廉人も気づき、目をこする。

律子「ごめんね、何でもないから寝てて」と廉人の頭を撫で、布団を出る。

○同・玄関（夜）

内鍵を解除し、ドアを開ける律子。

酔い潰れた誠一（53）が担ぎ込まれる。

中年男「すいません、飲ませ過ぎちゃって」

律子「いえ、こちらこそご迷惑を……」

中年女「原さん、今日は珍しく荒れてらして。

「俺は孤立無援だー」なんて。こんなに皆

から支持されてる人、他にいないのに」

律子「いえ、恐縮です……」

×

×

×

家上がる誠一。鍵を閉める律子。互いに背を向けた状態で言葉を交わす二人。

律子「出るんだ、市長選。私聞いてないけど」

誠一「何度も言おうとしましたけどね」

覚束ない足取りでトイレへ向かう。

○同・廊下（夜）

トイレから苦しそうな嘔吐音。

律子、そのドアの前に立ち、

律子「あの子の面接で、あなたのこと言われた。お父様が市長になる地元の中学で十分なんじゃないですか」って

誠一の声「んなら廉人の才能はそこまでって

ことなんオエエーッ……」

律子「（ドアを睨みつけ）……」

水洗面がして誠一が出てくる。口周りに

吐しゃ物が付いている。

嫌悪の目を向ける律子。

誠一「第一、親がどうこうで何か変わるの？廉人のためって言うんなら、それこそ本人の力を信じてやれよ」

律子「……（怒りに笑い）さすが政治家さん。

（手を口の前でパクパクさせて「口先だけは」とジェスチャーし）ご立派で」

手を振り上げる誠一。

○同・階段（夜）

ハッ…… 廉人が必死で口を押え、暗い階段の中腹から二人を見下ろしている。

○同・廊下（夜）

誠一、振り上げた手を空中で震わせ、
誠一「俺がお前らのために外でどんだけ……
……！ 少しは俺の身にもなってみろよ！」
と上げていた手で律子の髪を鷲掴みにし、
頭を繰り返し上下させる。

○同・キッチン（夜）

コップに水を注ぐ律子。ダクダクと溢れるのをじっと見ている。
しばらくするとコップを置いてしゃがみ込み、シンク下の戸棚を開けて奥を漁る。
と、背後に人の気配を感じ、はっと振り向く。そこにいたのは廉人だった。
屈んだ姿勢のまま廉人を見上げる律子。
廉人、黙って歩み寄り、律子の頭をそつと撫でる。

子供のように泣きじゃくる律子。
床に転がる、白い粉末入りの瓶……

○同・ダイニング（朝）

食卓を囲む律子、廉人、誠一。
テレビの音声「というわけで、今日は絶好のお花見日和！ 但し夕方以降、気温はグッと下がりますので花冷えにはご注意ください」

誠一「よかったなー、廉人。楽しみだなあ」
オムレツを咀嚼しながら曖昧に頷く廉人。

律子「廉人、お口」
とケチャップの付いた廉人の口元を拭う。

誠一「……律子、」
律子「（廉人に）美味しい？」

父親の顔色を気にしつつ頷く廉人。

誠一「（ややキツめに）律子、」
誠一を見る律子。

誠一「今日頼むね？ その場だけでもさ、感

じよく」

律子「(笑顔を作り)「ご心配なく」

ムツとしつつ食事続ける誠一。

口角を上げたまま箸を止める律子。

それを見つめる廉人。

○道・原家前

大きめの鍋を抱えて家から出てくる律子。

続いて廉人も出てきて、

廉人「重い？ 持つ？」

律子「ありがとう。すぐそこだから大丈夫」

並んで歩く二人。行く先に桜並木。

○××公園・炊事場

火にかけられる鍋。

白くどろりとした液体をかき混ぜる律子。

廉人が隣に立ち、それを見ている。

ふいに手を止め、やや遠くを見やる律子。

『××町内会お花見会場』と陣取られた

ブルーシートに人が集まって来ている。

その輪の中心には誠一の姿が。

誠一「へえ、初優勝ですか！ 男の子はやっ

ぱり野球ですよねー。うちの子もそちらで

シゴいてもらおうかな。ハハハ」

来る人来る人にへこへこしている誠一。

律子「(醒めた目で見て)お父さん、あの人達

が怖くて廉人の夢を潰そうとしてるのね」

廉人「(律子を見上げ)じゃあもしあの人達が」

瞬間、誠一がこちらを向いて手招きし、

「律子」と笑顔で呼びかける。

ぱっと笑顔を作って応じる律子。

律子「(廉人に)ごめんね。ちよっと火い見て

てもらえる？」

と言が残し、小走りで輪の中へ向かう。

集団に溶け込み、誠一と一緒に頭

を下げたり愛想笑いをしたりする律子。

廉人、それを見ながら右手で左上腕部を

ぎゅうと握り、爪を目一杯めり込ませる。

と、鍋に一片の桜の花びらが舞い落ちる。

それを取り除こうとする廉人。が、熱く

て手を引っ込める。花びらはかえって奥に追いやられ、白濁液に呑まれて消えた。鍋を見つめる廉人の顔を湯気が覆う……

○同（夕方）

鍋の周りに群がる人々。皆寒そうである。律子が甘酒を取り分け配っていく。

○同・ブルーシート（日没時）

誠一を囲い、円陣を組んで歌い出す人々。日が陰るにつれ乱痴気騒ぎと化していく。その様子を落胆の目で見ている廉人。廉人の手を引き「帰ろう」と促す律子。

○道（日没後）

廉人の手を引き歩く律子。

と、背後で悲鳴が。振り向く律子と廉人。町内会の人々が、一人、また一人と、激しい痙攣を起こして卒倒する。

律子の手を強く握る廉人。どこか高揚した誇らしげな目でその光景を見ている。

律子「……！」

○××公園

満開の桜並木。その木々を縫う規制線。

○病院・個室

ベッドに座り、茫然とテレビを見る誠一。

××公園からの中継。画面下には『薬物混入甘酒事件 死者3名に』とのテロップが。

リポーター「現在県警では使用された薬物の流通ルートから犯人の割り出しを――」

○原家・リビング（夕方）

ピンポーン。ピンポーン……

繰り返し鳴らされる玄関の呼び鈴。

やがてノックに変わり、コンコンコンという音が静まり返った室内に木霊する。と、パタン！ トロフィーが倒れる。

――律子が廉人の体をピアノに押し付け、

その首をゆつくりと絞め上げている。

廉人「……生まれてきてごめんなさい」

律子、はっと手を緩め、

律子「あなたは私の命……（首を横に振り）

それ以上……それ以上の……」

と廉人をきつく抱きしめる。

男の声「原さーん、いらつしやいますか？ 警

察です。ちよつとお話を伺えますか？」

ノックの音が激しくなる。

○同・玄関（夕方）

泣き継る廉人。小指を差し出す律子。

ゆびきりをする二人――

優しく微笑み、小指を解く律子。

すつと背筋を正し、ドアに手をかける。

○拘置所・独房

ギィー…… 独房に入れられる律子。

○同・面会室

総白髪の弁護士・内山美樹（45）と接見

中の律子。

内山「――ですので、動機をお話しいただけ

ない限り、極刑は免れません」

律子「（遮り）手紙。どうでしたか、今度は？」

内山、ピクリと口角を引きつらせ、カバ

ンから封筒を取り出す。宛名の上に『あ

て所に尋ねあたりません』の判が。

内山「おそろくまだ落ち着かないのでしよう。

加害者家族はどうしても世間の厳しい目に

晒されますので」

律子「（懇願の目で）先生だけが頼りなんです」

内山「ですから、ご家族の平穏な生活のため

にも動機を」

ヒタッ！ 内山の顔の前のアクリル板に

手をかざし、話を遮る律子。

律子「子供の姿が見えない時の怖さって、先

生、わかりませんか？」

内山「……」

律子「いらつしやらないんですね、お子さん」

○同・独房（夜）

真新しいノートの表紙に『私の宝物へ』と記す律子。
めりつと音を立てて捲られる1ページ目。

○中学校・校門前（夕方）

パシヤッ カメラのシャッター音。
ぶかぶかの学ランを着た廉人（13）が、
引きつった笑顔で校門前に立っている。

○畦道（夕方）

田舎の畦道を走る古い軽自動車。

○走る車の中（夕方）

運転席に誠一、助手席に廉人。
バックミラーを見る誠一。廉人と同じ学
ランを着た子供達が携帯のカメラをこち
らに向けるなどしている。

誠一「無理しなくていいからな」

廉人「え？」

誠一「学校。通信教育とか、どうとでもなる
だろう」

廉人「（自分の手を見つめ）……」

○拘置所・独房

刑務官から封筒を受け取る律子。裏の差
出人欄には『原誠一』とある。

× × ×
手紙を読む律子。『——静かで良い所です。
廉人は毎日元気に登校しています——』
添えられていた写真を手に取る律子。

そこには大きめの学ラン姿の廉人が……
その強張った笑顔を愛おしそうに撫でて
涙する律子。

× × ×
白い便箋にペンを下ろす律子。『廉人へ』

○中学校・教室

テスト用紙に名前を書く廉人。

○同・校門（夕方）

一斉に下校する生徒達。

○同・体育館（夕方）

ガランとした体育館に佇む廉人。
床に転がるバスケットボール……
廉人、しばしそれを見つめた後、その場を離れてステージの方へ向かう。

○同・ステージ（夕方）

西日に照らされる、ステージ下手の古い
グランドピアノ。
消音ペダルをしてピアノに向かう廉人。
譜面を見ながら弾こうとするが辿々しい。
諦めて目を瞑り、別の曲を演奏し始める。
こちらは流暢だ。
と、バコン！ 消音ペダルを外す、女子
生徒の足。

廉人の弾く曲が体育館じゅうに響き渡る。
はっと目を開き、演奏をやめる廉人。

横で飛び跳ねケタケタと笑う関楓香（13）。

楓香「上手いんに。続けて？」

廉人「（怪訝に見て）……」

楓香、楽譜を覗き見つつ、

楓香「勉強は？ 頭いいん？ 原君」

廉人「……別に。そっちは？」

楓香「そっちじゃなくて、関。関……楓香」

廉人「や……知ってるけど」

楓香「ならそう呼んでよ」

廉人「（面倒そうに）関さんは？」

楓香「関さん、前回1位だから」

廉人「……へえ」

楓香「よく自慢できんなー、この過疎地で

1位とか。プギャー」

廉人「（呆気にとられ）??」

楓香「思ったでしょ」

廉人「（かぶりを振り）いや……尊敬する」

楓香「思っていないよね」

廉人「……」

楓香「私さ、わかっちゃうんだよね、先生達の重箱の隅のつき方みたいなのが。生まれてこの方、人の顔色ばっつか気にして生きてきたんで」

廉人「へえ……」

楓香「例えば歴史。資料集の写真の下のキャプションとかから出してくるよ。あの先生、大らかぶってめっちゃチマチマしてるから」

廉人「ふーん……」

楓香「他も知りたい？」

廉人「や……」

楓香「(馴れ馴れしく肩を叩き) だいじよぶ、だいじよぶ、お金とか取らないから」

廉人「いや、そろそろ俺の顔色を気にしてもらえると……」

楓香「(廉人の顔をまじまじと見て) うん」

廉人「いやいや、ほっといてください一色で攻めてるんですけど」

楓香「寂しいって滲みまくってるけど？」

廉人「……前回多分まぐれだよ。家帰って普通に勉強した方がいいんじゃない？」

ムスツとしてステージを下りる楓香。

目で追ってしまいう廉人。

○同・体育館(夕方)

楓香、バスケットボールを拾い、

楓香「自分のこと差し置いて人の心配してくれるなんて、原君、チョー優しいねっ」とシュートする。スパッと入る。

廉人「友達いないの？」

楓香「んー、表向きは？」

廉人「友達に裏向きとかあるんだ」

楓香「(ボールを拾い) ほらあれ、友達多い人の秘密の親友的ポジションってあるじゃん」

廉人「(小首を傾げ) あるんだ」

楓香「皆にいい顔していると疲れるじゃない。

だからその捌け口が要るわけよ」

またシュートするが、今度は入らない。

廉人、転がるボールを見つめて呟く。

廉人「そもそもそれ、表向きにも裏向きにも

親友じゃないよ」

楓香「あつは！　ごもっともっ！」

とボールを拾って廉人に投げつける。

○同・ステージ（夕方）

当たって落ちたボールを見つめる廉人。

楓香「ノリ悪っ！　なんかいいわけ？　いい

っって！　骨折れたわ！　とかさ？」

廉人「……」

楓香、溜息をつき、ステージに上がる。

廉人「……骨折れても、言わないと思う」

楓香「え？」

廉人「痛いとか、よくわかんないから」

楓香「……（バシんツと肩を叩き）一緒にじゃ

ん！　一緒に、イエーイ！」

とハイタッチを求める。

廉人「（ポカンとし）……」

楓香、改めて下から手を差し出し、

楓香「なってよ？」

廉人「え？」

楓香「親友」

廉人、微かに震える楓香の手を見つめ、

廉人「……そうやってなるもん？」

楓香「知らない。いないから」

廉人「……ごめん。帰って勉強する」

譜面をしまつて席を立ち、階段を下りる。

と、楓香が座って演奏し始める。それは

廉人が最初に弾こうとしていた曲である。

振り返り、見上げる廉人。

楓香「読めないんでしょ？　楽譜」

○アパートの一室・居間（夜）

寝室の戸をそつと開けて出てくる廉人。

スマホの灯りを頼りに、棚の裏から分厚

いクリアファイルを取り出す。

中身は全て律子からの手紙類。そこから

楽譜のコピーだけを抜き取っていく。

○中学校・非常階段

踊り場で待つ楓香。やって来る廉人。

カバンから紙の束を取り出す廉人。

楓香「て多っ！いきなり凶々しくくない？」

廉人「……親友だし？」

楓香「なっていないよね？」

すっと手を差し出す廉人。

楓香、その手をパシンと払い、

楓香「なんかさ、秘密ちよーだい？ そした

らなっただけ？」

廉人「……」

楓香「あるでしょ、なんか。とっておきの」

廉人「……母ちゃんがムシヨにいる」

楓香「うん。皆知ってる。テカまだコーチシ

ヨでしょ？」

廉人「詳しいね。一生コーチシヨかもだけど」

楓香「へー。死刑ってそこでやるんだ」

廉人「つかさ、皆知ってても言わないけど」

楓香「言われた方が楽でしょ？」

廉人「そうね、……親友だし」

楓香「まだ知り合いくらいだけど」

廉人「(不貞腐れ)じゃ、もういいや」

と階段を下りる。楓香も後を追う、

楓香「ママのはママのでしょ。キミの秘密を

訊いてるんだよね、私は」

廉人「(背を向けたまま)……人殺した」

楓香「(無邪気に顔を覗き)何人何人？」

廉人「三人」

楓香「(じっと見つめ)……オッケ。預かる」

と廉人から譜面の束を奪い取る。

○拘置所・面会室

接見中の内山と律子。

内山「ええ。なんとかかなりそうです」

律子「……！ありがとうございます」

内山「ただ、ご家族に限り、ですけど」

律子「(感極まり)十分です。息子にさえ会え

ればもう……」

○同・体育館・ステージ(夕方)

ピアノを弾く楓香。

隣に座り、指の動きを目で追う廉人。

と、鍵盤の下で二人の膝が触れ合う。
咄嗟に足を引く廉人。

楓香は何食わぬ顔で演奏し続けている。

廉人「(その横顔をちらりと見て) ……」

さりげなくまた膝を触れ合わせる。

楓香「(弾きながら) こういうの好きなん？」

廉人「(ドギマギし) は？」

楓香「曲」

廉人「ああ、いや…:」

楓香「(鼻で笑い) ママの趣味ね」

廉人、ムツとし、足を引く。

○拘置所・面会室

アクリル板越しに再会する母子。

テーブルの上で流暢に動く廉人の指。

それを見つめる律子。

脳内に響くピアノの音色に酔いしれる。

が、次第にその旋律が歪んでいき…:

律子「(顔を曇らせ) なんか、変な癖ついちゃ

ってる…:」

廉人の指が固まる。

律子「ああ、ごめんね。(笑顔を作り) でも嬉

しい。ちゃんと練習してくれてて」

廉人「変？」

律子「お母さんにお金があれば、ちゃんとし

た先生つけてあげられるんだけど…:」

廉人「変って？」

律子「ごめんね、違うの。ただ、うーん…:」

廉人「変…:」

× × ×

軽やかに動く律子の指。じっと見る廉人。

× × ×

アクリル板越しに同時に指を動かす二人。

重なって響く美しい旋律…:

○走るバスの中(朝)

登校中の学生で騒がしいバスの中。

前方の席にぼつりと座っている廉人。

同じ制服を着た生徒達が廉人の方を見て

「おい、やめろよ、可哀想だろう」など

と言ひ合い笑っている。

最後方の席からそれを見ている楓香。

×

×

×

窓の外を流れる田園風景。『××電機××店1.3km先右折』の看板が廉人の目に入る。しばし逡巡し、降車ボタンを押す廉人。

○家電量販店・内

電子ピアノを弾いている廉人。

○アパートの一室

カーテンを閉め切った部屋。

カップ麺が出来上がるのをじっと待つ誠

一。携帯の時計の数字が変わるのを見て、

蓋に乗せていた割り箸を割ろうとする。

と、着信が。思わずビクツとなる。

×

×

×

カップ麺の蓋が蒸気で捲れ上がっている。

誠一「(電話相手に)ええ。私としては、あまり無理強いせずに見守ってやれたらと……」

○同・台所

シンクに捨てられる伸びたカップ麺。

○同・洗面所

洗面台に散る伸びた無精髭。

○拘置所・面会室

面会中の律子と誠一。

律子「不登校？」

誠一「(頷き)もう二週間って」

律子「……」

誠一「正直なところ言うと、どこまで逃げても

ダメなんだよ。俺でも滅入るような嫌がら

せが連日で。しかもあの年頃の子達って、

俺らが思ってる以上に残酷だから……」

律子、俯き、ゴクと唾を飲む。

誠一「いや、責めてるわけじゃない。俺は今も何かの間違いだと思ってる。律子を信じてる」

律子「私を？ 私を選んでしまった自分を、
じゃなくて？」

誠一「(溜息をつき)喧嘩しに来たんじゃない」

カバンから書類を取り出す誠一。

誠一「今日これ置いてくけど」

律子、差し出された書類を見て、

律子「(怪訝に)養子？」

誠一「(神妙に頷き)廉人の将来考えたら」

律子「ちよつと待ってよ、本人には？」

誠一「いや。律子に相談してからと思つて」

律子「(軽く鼻で笑い)相談？」

誠一「律子、…俺は絶対律子を見捨てない。

一人にしないよ。だから、」

律子「(遮り)本人に聞いて」

○アパートの一室・居間(夜)

黙りこくっている廉人。向かいに誠一。

テーブルの上には養子縁組に関する書類。

誠一「何もバツサリお父さん達との縁が切れるわけじゃない。お父さんもお母さんも廉人のことを誰より想つてる。だからこそ、」

廉人「(被せて)いいよ、離婚してくれても」

誠一「え？」

廉人「俺はお母さんに付く」

誠一「どうしてそうなるんだよ？ お父さん

はただ廉人のために」

廉人「いいって。逃げたいんなら一人で逃げ

てよ。…お父さんは他人なんだし」

誠一、絶句し、頭を掻き筆る。

廉人「…行くから、普通に。学校」

○中学校・教室

授業中。机の下でスマホをいじる楓香。

ネットニュースのトピックに『薬物混入

甘酒事件 今日初公判』とある。

顔を上げ、斜め前の廉人の背を見つめる。

○地方裁判所・法廷

証言台に立つ律子の背中。

満員の傍聴席から見つめる誠一。

律子「はい。間違いありません」

○中学校・教室

給食配膳の時間。騒がしい教室内。
大鍋の中でかき混ぜられるシチュー。
白いエプロン姿の廉人がそれを器に盛る。
トレーを手にした生徒達はその前を素通
りしていく。

担任教師は見ても見ぬふりをしている。
と、一人の生徒がスマホでニュース動画
を再生し始める。

アナウンサーの声「原告は起訴内容を全面
的に認めているということですよ――」

周囲の生徒達が「死刑かよ――」「おい、
聞こえるだろ」等々とざわめく。

見かねた担任がスマホを取り上げに行く。
と、空のトレーを持った楓香が廉人の前
に立ち、鍋の横に並ぶシチューの器を乗
せられるだけ乗せていく。

廉人「(手を止め)……死にたいの？」
皆が一斉に見る。静まり返る教室内。

○同・体育館・ステージ(夕方)

バコン……バコン……

楓香が一人ピアノの椅子に座り、消音ペ
ダルを踏み込んだり外したりしている。
やがてスマホを出して検索画面を開き、
『原律子 息子』と入力する。

○拘置所・面会室

一緒に指を動かす律子と廉人。

律子の脳内に流れる調和した旋律。

が、微妙にズレ始め……

律子「ここがね……、わかんない？」

廉人「……」

律子「ごめんね。限界あるよね、これじゃ」

廉人「……もういいよ。出てから教えてよ」

律子「!(目で威圧する)」

廉人「……だって俺なら死刑には」

律子「(凄み) 廉人」

口を噤む廉人。

律子「約束、忘れないで」

×

×

×

内山と接見中の律子。

律子「証人？ 全部認めてるのに？」

内山「はい。検察側としてもやはり、ご本人の自白だけでなく、できるだけ慎重に裏付けを取る必要があるわけです」

律子「……子供なんですよ？ まだ」

内山「ええ。その辺りには最大限の配慮がなされるかと」

律子「配慮ですか……」

○同・独房（夜）

ペンを強く握り、手紙をしたためる律子。

『——私のためにあの子の夢を潰したくないのです。どうかお願いします——』

○××中学校・体育館・ステージ（夕方）

『カエルの子は』『カエル』左右を通して
そう落書きされたシューズ。そのつま先
でピアノの消音ペダルを踏み込む廉人。

×

×

×

演奏しながらぼんやりとバスケット部の練習
風景を見やる廉人。声援に応えてシュー
トを決める裕翔（14）に気をとられ、鍵
盤の上で指がもつれて曲がつかえる。
ピアノに目を戻す廉人。と、その鏡面に、
厳しい目で見下ろす律子の顔が映り込む。
ぎよっとして振り向く廉人。

楓香「（見下ろし）続けてよ？」

廉人、演奏を再開しようとするが指が震えて動かない。

楓香「直接指導受けてたんだ？」

廉人「……」

楓香「才能あったんだってね、ママさん」

廉人「（ボソッと）……ネット」

楓香「え？」

廉人「（見向き）ネット情報？」

楓香「……」

廉人「秘密とかさ、わざわざ聞くまでもないよね」

楓香「ごめん。心配だったから」

廉人「心配？ 面白がってるだけでしょ？ 遊び相手いなくて暇だから」

楓香「(憤り) ……」

体育館で部活中の生徒達が二人に注目し、何やら噂している。カメラを向けて写真を撮る者も…

と、バスケに熱中していた裕翔がボールを放り、ステージの方へやって来る。

裕翔「(ステージ下から楓香に) ほっとけよ、関係ないんだから」

楓香「…：そっちがほっといてよ」

廉人「ああ、例の裏向きさん」

裕翔「は？」

ズカズカとステージに上がる。

廉人「(楓香に笑いかけ) よかったね、表に出て来てくれて」

○同・渡り廊下(夕方)

速足で体育館から出てくる楓香。

身重の教師・皆川(29)とすれ違う。

○同・音楽室(日没後)

ピアノを弾く廉人。真剣に見つめる皆川。

皆川「手紙…：読む？」

廉人「(演奏を止めて見向き) ……」

皆川「いいお母さんなんだね」

目を潤ませ、律子の手紙を差し出す。

×

×

×

廉人、長い手紙を読み終え、皆川に返す。

皆川「(手を重ね) これはあなたが。先生、産休ギリギリまで精一杯応援するから」

目を伏せる廉人。視線の先で、ピアノの

鏡面に映る皆川の顔が律子になり替わる。

優しく微笑み、熱い眼差しを向けている。

○地方裁判所・法廷

被告人席の律子、法廷の一角を囲うパー

テーションを見つめている。

検察官「(パーティーションに向かって)事件当日、お母さんが何か粉末を鍋に入れるのを目撃しましたか？」

廉人の声「……いえ、見ていません」

検察官「お母さんと自宅から公園へ向かう際、何か荷物を運ぶのを手伝ったりは？」

廉人の声「いいえ」

検察官「では事件以前、お母さんが、お父さんや家に来たお客さんに薬物を投与しようとしているのを見たことはありませんか？」

廉人の声「ありません」

検察官「お母さん自身が薬物を使っているのを見たことは？」

廉人の声「いいえ」

検察官「よく思い出していたら、もしかしたらあの時薬物を用いていたのかもしれないな、と思い当たる節はありませんか？」

○同・パーティーションの中

俯き加減に椅子に座っている廉人。

検察官の声「——例えば、お酒も飲んでいないのに酔っ払っていたり、普段のお母さんらしくないことを言ったり、騒いだりといった」
廉人「いいえ。……母はいつも、母でした」
と顔を上げ、パーティーションを見やる。

○同・法廷

外側から同じパーティーションを見る律子。

○××県立文化会館・ホール・観客席

ステージに向けられる無数の人の目。
その中に、際立って暗く沈んだ目が……
楓香である。

○同・ステージ

眩い光の中、無心にピアノを弾く廉人。

○同・ロビー(夕方)

紙袋を提げて出てくる廉人。

そこへ駆け寄る一人の男（週刊誌記者）。
記者「やー、素晴らしかったです」

廉人「（警戒し）……」

『××出版』と入った名刺を出す男。

記者「ちよつと時間もらえるかな？」

無視して歩く廉人。付き纏う男。

と、そこへ楓香が割って入って来て、

楓香「（廉人に）演奏、最っつ高でした！ サ

インとかもらえたりします？」

廉人「（戸惑い）……」

記者「ほんと、ちよつとなんで。ね？」

いつの間にか一般客も周囲を取り囲み、

ざわついている。

記者「とりあえず人目のないところこう。ち

よつとだけね、お母さんのことで」

廉人の腕を強引に引く。

楓香「（記者に凄み）関係ない！」

と廉人のもう片方の腕を力一杯引つ張る。

その反動で記者の手が離れ、廉人はバラ

ンスを崩して楓香の方へ倒れ込む。

○国道・歩道（日没直後）

つかつか歩く楓香。膝に痣ができている。

斜め後ろを気まずそうに歩く廉人。

廉人「大丈夫？ ……なんかごめん」

楓香「なんで？」

廉人「や、だってなんか……」

楓香「（見向き）自意識過剰じゃない？」

廉人「（止まり）……」

楓香「めっちゃスツキリしたわ。ストレス発

散。むしろどーもありがとう（笑う）」

廉人「……関さんのお母さんも何か？」

楓香「（すつと笑みが引き）普通の人だよ？

よくいる感じの、普通のママ」

廉人「普通……」

と、二人の横をバスが通り過ぎていく。

楓香、はつとスマホを出して時間を見て、

楓香「やーば、最終じゃん……」

と、そこに着信が。『ママ』とある。

○同・歩道橋（夕方）

歩道橋の上。

下を行き交う車を見ながら電話する楓香。

楓香「……全然へーきだって。電車もあるし……だからなんでそうなるん？……あーも、ごめん、ごめんって。……そうだよね。うん、はい。はい。ありがとう（切る）」

○同・歩道（夕方）

歩道橋を見上げ、呼びかける廉人。

廉人「大丈夫？」

楓香「（上から）迎え来るって。これ以上刺激したくないんで、一人で帰ってもらえる？」

廉人「あ……うん、はい」

寂然としない様子で踵を返す廉人。

楓香「（その背に）あ、そうだ。あれ嘘ね」

廉人「（振り向き）？」

楓香「〃演奏、最高でした〃って。やめちゃえばいいのにとしか思わなかった」

と吐き捨て、反対側の歩道を目指す。

廉人、立ち尽くし、自分の手を見る。

○アパートの一室・外（夜）

ジイイツ……ジイイツ…… 切れかけた

蛍光灯に照らされるアパートの外廊下。

紙袋を提げて歩いて来る廉人。

壁面を滴るスプレーインクの黒い液……

外壁とドアを横切って描かれた五線譜。

下向きの音符が横線に首を吊られた棒人間になっている。

そのドアの前で立ち止まる廉人。

○同・玄関（夜）

ガチャツ ドアを開け、入ってくる廉人。

居間から飛び出してくる誠一。廉人の体をあちこち触って確かめながら、

誠一「無事か？ 無事だな？ よかった……」

と、居間からニュース番組の音声が。

リポーターの声「――ですが、現在は空き家となっており、何者が嫌がらせで放火した

可能性が高いと見て――」

ドアの隙間から漏れるテレビ画面の光。見つめる廉人。唾然とし、紙袋を落とす。コロコロ……中から表彰状の筒が転がる。

○同・居間（夜）

音量がかなり絞られたテレビ。お気楽なバラエティー番組が流れており、甲高い笑い声だけが浮き立って聞こえる。

食卓につく廉人。目の前にはパック寿司。

誠一、向かいに座って割り箸を割り、

誠一「よし、食べよ、食べよ」

廉人「……」

誠一「あんま好きじゃなかったんだっけか？

お祝いのつもりだったんだけど……」

廉人「（首を横に振り）ありがとう」

と割り箸を割る。

○××公園

花見をした公園に佇む廉人。

視線の先には、真黒く焼け落ちた自宅が

……所々、細い煙が上がっている。

○拘置所・面会室

……ハァ……アクリル板の通声穴から漏れる律子の溜息。

それを受け、鼻をヒクつかせる廉人。

律子「家よりね……ピアノが……。お母さ

んの宝物だったから……」

廉人「ごめん」

律子「なんであなたが……」

廉人「コンクールなんか出たから」

律子「何言ってるの。廉人は本当に素晴らし

いことをしてるの。お母さんの自慢よ？」

廉人「けど、お父さんや親戚にも迷惑かかる

し、次の大会はもう……（目を伏せる）」

律子「廉人？ 廉人。お母さんの目見て？」

顔を上げる廉人。

律子「いい？ あなたはそんなこと気にしないでいいの。全部、お母さんの罪」

律子の脳内には今、裁判長の声ではなく、
壮大なピアノの音色が鳴り響いている。

○コンサートホール・ステージ

演奏を終え、鍵盤から手を下ろす廉人。
パチパチ……客席から盛大な拍手。
席を立つ廉人。

○裁判所・法廷

真つすぐ前を見据えて証言台に立つ律子。
裁判長「主文、被告人を死刑に処する」
微動だにしない律子。が、表情は柔らかく、その口元には微かに笑みも。
バタバタ……傍聴席前方に座っていた
マスコミ陣が一斉に出口へ向かう。

○コンサートホール・ロビー（夕方）

大きなトロフィーを抱えて出てくる廉人。
瞬く間にマスコミに囲まれる。矢継ぎ早
に質問を浴びせられ、息が上がっていく。
「お母さんのこと」……ハア……「判決
をどう」……ハアハア……「死刑につい
て」……ハツハツハツ……「死刑、死刑、
死、死」……ツハツツ……「死刑！」
その声が大きく響いて世界が傾き、目の
前が真つ白になり——ホワイトアウト。

○週刊誌・誌面

ペラッ……開かれる『週刊××』。
大きなトロフィーを抱えた廉人のモノク
ロ写真。顔には太い目隠しラインが。
傍らに貼り付く律子の切り抜き写真。
その上に『14歳の天才ピアニスト、母は
渦中の死刑囚!!』との見出しが躍る。

○拘置所・独房（夜）

その記事を読み進める律子。
『——コンサート関係者らの支援を受け、
高校進学を待たずに留学の話も。母との
しがらみを断ち切り自分の人生を謳歌し

たい気持ちもよくわかる——』とある。
律子「（“しがらみ”の文字を見つめ）……」

○同・面会室（日替わり）

ギィ…… 入室する律子。

アクリル板の向こうで待つ息子の姿がや
けに遠ざかって見える。

×

×

×

面会中の二人。

律子「（虚ろに微笑み）おめでどう」

廉人「……（俯く）」

律子「廉人？……」

今にも泣き出しそうな廉人。

律子「廉人……」

項垂れ、影を帯びていく廉人の顔。

対照的に、生気を帯びていく律子の顔。

律子「……廉人？ 観に行けなかったけど、

お母さんにはちゃんと聴こえてたよ？」

おずおずと顔を上げる廉人。

澄んだ目で笑いかける律子。

律子「よく頑張った。偉かったよ。お母さん

本当に誇らしい気持ち」

廉人「（見つめ）……」

律子「で……、留学は？ どうするの？」

廉人「え？」

律子「何でも知ってるよ？ あんたのお母さ

んだもん。行くの？」

廉人、目を逸らし、首を横に振る。

律子「どうして？」

廉人「それはわかんない？」

律子「（困ったように笑い）お母さんは大丈夫。

廉人が世界で頑張ってるって思ったら、お

母さんも張り合いがある。そうやって待つ

てるから、何も心配しないで行っといで」

廉人「なら控訴して少しでも時間稼いでよ」

律子「（首を横に振り）これ以上あなたの負担

にはなりたくない」

廉人「負担って何だよ！ そもそもさ、」

律子「（遮り）死刑には、早くなりたいと思っ

てる。これがお母さんの本音」

廉人「（目に涙を溜め）……」

律子「だってほら、死んじゃえばもう、牢屋や法律に縛られることもないでしょ？」

身を乗り出し、通声穴に口を近づけて、律子「（囁く）廉人の傍に、ずーっといられる」

その息を受け、廉人の腕に鳥肌が立つ。それに気づかず微笑みかける律子。

○アパートの一室・寝室

布団に横たわっている誠一。痩せこけて血の気もなく、ミイラのようなのである。

グゥ…… 腹が鳴った。

○同・洗面所

鏡の前で無精髭を気にする誠一。

溜息をつき、洗面台の端に手を伸ばすが、そこには何もない。

○同・玄関（夕方）

コンビニの袋を提げて帰ってくる誠一。

玄関に廉人の靴があるのを見て、誠一「ただいまー」

…… 応答はない。

○同・洗面所（夕方）

手を洗う誠一。と、洗面台にカミソリが。

小首を傾げてよく見ると、刃先に水滴が付いている。

○同・寝室（夕方）

そっと襖を開けて中を覗く誠一。

そこには胎児のように体を丸めて眠る廉人の姿が。その安らかな寝息……

そっと襖を閉める誠一。

○同・居間（夜）

弁当の唐揚げを頬張る廉人。顔色が良い。

誠一、廉人の口周りをまじまじと見て、誠一「（明るく）どう？ 最近、学校は？」

廉人「…… 普通、かな」

誠一「あれだ、好きな子とかいるんじゃないのか？ 年頃だし、な？」

箸を置いて席を立つ廉人。

誠一「お、お、たまにはいいだろう？ 男同士、そういう話も」

廉人「(背を向けたまま) ……死刑って普通、どのくらいで執行されるの？」

誠一「……」

廉人「調べたら、半年以内とか出てきたけど」

誠一「そういう目標になってるみたいだけど、本当にそんなに早く執行されるケースは滅多にないよ」

廉人「(見向き) 滅多にって？」

誠一「絶対ないとは言えないけど……」

廉人「平均は？」

誠一「平均……」

しびれを切らして玄関へ向かう廉人。

誠一「おい廉人！」

慌てて立ち上がり、腕を掴もうとするが掴み切れず、袖を引っ張る格好となる。すると、廉人のシャツのよれた襟口が肩まで落ち、上腕部が露出する。そこには幾つもの生々しい切り傷が……サツと隠す廉人。

○同・洗面所(日替わり)

髭を剃り終えた誠一。

カミソリを見つめ、刃を自分の腕に押し当ててみる。プツツと血が出る。

誠一「(頬をピクリとさせ) いっ」

すぐにその刃をジャツと洗って水を切り、鏡の後ろの手も届かないほど奥へと隠す。

○雑居ビル

マスコミに集られながらビルに入る誠一。やっとの思いでエレベーターに乗り込み、『××法律事務所』の階を押す。

○弁護士事務所・応接室

落ち着かない様子で応接椅子に座り、ブ

ラインドの隙間から窓の外を眺める誠一。
道で待機するマスコミが見える。カメラ
を構えてこちらに向けている者も……
カチャッ ビクッとドアの方を向く誠一。

内山「お待たせしました」

と入室し、ブラインドを完全に閉じる。

誠一「(おずおずと頭を下げ) 妻がいつも」

× × ×

内山、コーヒーカップを置き、

内山「お気持ちわかります。ですが、ご本人の意思がない限り、こちらとしては……」

誠一「でしたら先生、妻をどうにか説得していただけませんか？」

内山「はあ。もちろん最善は尽くしておりますが……」

誠一「(恐縮し) や、本当に色々……」

内山「それこそ、ご主人から説得していただくのが一番かと思いますが」

誠一「そう……すべきなのでしょう……」

内山「残念ですが私は、情緒の面で依頼人と交流できるほど出来た弁護士ではありません。奥様は、言ってしまったら赤の他人です。もしそれ以上を求められるのであれば、どうぞ別の弁護人を」

誠一「(被せて) 私もです」

内山「はい？」

誠一「私も……、(目を逸らし) あの、ちょっと気色の悪い話をしてもいいですか？」

内山「? ……ええ」

とコーヒーカップを手に取る。

誠一「……私、判決の時、妻を見て、ああ、綺麗だなあなんて思ったんです」

内山、カップを口に運ぶ手を止める。

誠一「妻が本当にあの事件を起こしたのだとしたら、それは紛れもなく許されざることで、私の築き上げてきたものも彼女は台無しにした、憎むべき存在です。現に、頭では自分だけは妻を信じなければと言いつつ、憎んでいます。なのに、あの時は心から……。なんだかこう、凜として、

穏やかで、言ったらもう聖母みたいで……」

内山、静かにカッブを置く。

誠一「すいません。おかしいですよね」

内山「いえ……」

誠一「でも、あの日妻は……、（声を震わせ）

律子は、ただの一度も、俺を見なかった」

内山「……」

誠一「（苦笑し）所詮は他人なんです、私も。

妻にしてみれば……」

内山「（見つめ）……わかりました」

○拘置所・面会室

接見中の律子と内山。

律子「（焦燥し）あの人、ちゃんと刃物隠して
ますかね？ しつかり見張つ、注意して見
てるんですかね？」

内山「息子さん、刃物なんていくらでも自分
で調達できる年頃ではないですか？」
キュツと唇を結ぶ律子。

内山「そこまで過敏になる必要はないかと思
います。自傷というのは大概、本人にとつ
ては、生きるための行為ですから」

律子「（憤り）……！」

冷淡な目で応じる内山。

怒りを鎮めようと鼻から息を吐き、目を
伏せる律子。と、その目が内山の手首を
捉え、じりじりと腕を這い上がっていく。

内山、その視線に耐えかね、テーブルか
ら手を下ろす。

律子「（顔を見て）けど、どうしてあの人自身
が来ないんです？」

内山「それは……怖いんだと思います」

律子「怖い？」

内山「男の人って案外そういう所があるじゃ
ないですか。怖いんですよ、拒絶されるの
が。相手を愛していればこそ」

律子「？ 先生そんな言葉使うんですね」

内山、ムツとし、手をテーブル上に戻し、
パタリと手帳を閉じる。

内山「とにかく、息子さんの気持ちもよくお

考えになって、再度ご検討いただければ」
律子「(遮り)自分が傷つくのが怖いんですけど、結局あの人は。相手より自分の方が可愛いってことじゃないですか」

内山「……」

律子「私は怖くない。何にも怖くない」

と澄んだ目を向ける。

ぞつとし、目を背ける内山。

律子「あの、二つ、お願いできますか？」

○アパートの一室・居間

カーテンの閉めきられた部屋。

ぼーっとニュース番組を見ている誠一。

画面のテロップには『薬物混入甘酒事件、

このまま死刑判決確定か』とある。

テレビの音声「控訴期限まで残り一週間。動

機を明かさなのまま死刑判決を受けた被告

の動向に注目が集まっています——」

と、ピンポーン 玄関の呼び鈴が鳴る。

ビクツとしてテレビの音量を下げる誠一。

ピンポーン また鳴らされる。

○同・玄関

チェーンを掛けたままドアを開ける誠一。

その隙間から差し込まれる、厚さがまる

で異なる2通の書留封筒。

○同・居間

薄い封筒を開封する誠一。中から律子の

サインの入った離婚届が出てくる。

誠一「(茫然と見つめ)……」

○同(夕方)

帰宅した廉人に分厚い封筒を手渡す誠一。

廉人、受け取り、その場から立ち去る。

○同・風呂場(夜)

空の浴槽の中に座っている廉人。

何やらノートを読んでいる。浴槽の角に

は同じようなノートが3冊積まれている。

努めて深く息をしながらページを捲る廉人。その手は震えている。

○同・洗面所前（夜）

ドアの前から呼びかける誠一。
誠一「廉人？ 廉人？ 大丈夫か？ 気分悪いか？（ドアをノックし）廉人？ ……」

○同・風呂場（夜）

ガラスとドアを開ける誠一。
浴槽の中で胎児のように体を丸めて蹲る廉人を見つめる。

その腕をダラダラと伝う鮮血…
誠一「（駆け寄り）廉人！」

廉人「（寝惚けたような顔で）？」

誠一「（廉人の頬をぺちぺちと叩き）お、大丈夫か？ 廉人、廉人」

廉人「…：…ああ（目の焦点が定まる）」

誠一「（半泣きで）何してるんだよ…：…（はたと）救急車。今、救急車呼ぶからな」と飛び出して行く。
他人事のように見送る廉人。

○同・居間（夜）

震える手で携帯を取り『1、1』とボタンを押す誠一。

と、カチカチツ…：…風呂場の方からカッターの刃を繰り出す音が。

誠一、携帯を放り、そちらへ戻る。

○同・風呂場（夜）

廉人からカッターを取り上げる誠一。

浴槽から出てそれを奪い返す廉人。

廉人「ほつといてよ、頼むから！」

誠一「ほつとけるわけないだろう！」

もみ合いになる二人。

廉人「（思い切り振り払い）ほつとけて！」

これくらい自由にさせてよ！」

ズトツ！ 床に散らばっていたノートに

足を取られて転倒する誠一。

廉人「(ぜえぜえと息を荒げて見下ろし)……」
カッターを握る手に血管が浮き出る。
脂汗をかき、その刃先を見つめる誠一。

廉人「(目を見開き)ぐアア……ッ！」
カッターを振り上げ振り下ろす廉人。
両腕で顔を庇い、縮こまる誠一。
——パキッ…… その刃は『私の宝物へ』
と記されたノートを表紙を突き、呆気な
く折れた。

恐る恐る顔のガードを解く誠一。
と、廉人の手からカッター本体が落下し、
誠一はまた反射的に身を縮める。
廉人はもはやそんな誠一に目もくれず、
夢遊病者のごとくスーツと出て行く。

誠一「お、お、おい」
慌てて追おうとするが、腰が抜けていて
動けない。

〇××駅・ロータリー(夜)

人気のない田舎の駅のロータリー。
黒いスエット姿で佇む廉人。

楓香の声「通報するよ？」

振り向く廉人。

缶チューハイを片手に楓香が立っている。

楓香「不審者感ハンパないけど？」

廉人「……大丈夫だった？」

楓香「(苦笑し)うち門限日没前だかね？」

バレたらソッコロ搜索願出されるわ」

廉人「ごめん……」

楓香、溜息をついて飲みかけの缶チュー

ハイを差し出し、

楓香「……おめでどう、でいいのかな？」

廉人「(缶の口を見つめ)……」

〇××駅前広場(夜)

やや距離をとってベンチに座る二人。

ゴクリ…… チューハイを飲む廉人。

楓香「聞いたよ、留学の話も」

廉人「(ちらと見て)……」

楓香「嘘。読んだ。週刊誌で」

廉人「……一緒に行く？」

楓香「は？」

廉人「行こうよ。一緒に」

楓香「(失笑し) 楽譜の通訳として？」

廉人「いや、才能あるんだし。そっちも」

楓香「(周囲を見回し) そっちってどっちかしらーん？」

廉人「……楓香も。才能あるんだから」

楓香「(横顔を見て) ……」

廉人「関係者紹介するよ」

楓香「本来ならママと行きたいところ？」

廉人「(ムツとし) ……」

楓香、廉人の手から缶チューハイを奪って残りを飲み干し、

楓香「帰る」

立ち上がるが、足取りが覚束ない。

廉人も立ち上がり、楓香の体を支え、

廉人「俺、本気で」

楓香「私には私の将来があるので」

振り切り、歩き出す。

廉人「(追い) だったら向こうで何だってやればいいじゃん。絶好のチャンスだって」

楓香「バカなの？ 私は呼ばれてないの！」

と空き缶を投げつける。

廉人、構わず追い続け、

廉人「そんなん、そっちが、楓香が、勝手に

閉じ籠ってるだけじゃん」

楓香「色々あるんだよ、こっちも。クローンにはクローンの弁えがあんの！」

廉人「意味わかんないし」

楓香「だろうね。男の子だもん」

廉人「いや、知らないけどさ……、逃げたいんでしょ？ ほんとは。お母さんから」

イラッと睨む楓香。

廉人「なら行こうって！ 今逃げなかったら、

楓香の人生この先どうなるわけ？」

楓香「(凄み) それはあんたでしようが！」

圧倒され、立ち止まる廉人。

楓香「……うちら同類だね。人のためじゃないよ。きや怒れない。それじゃ誰も救われないよ」

また速足で歩き出す。

廉人「何だよ、それ。俺はただ楓香と」と腕を強く掴む。

楓香「離して、マザコン！」

ゴスツ！ 力一杯振り切った楓香の肘が廉人の顎を直撃した。

廉人「……！（目つきが豹変）」

ダツと走り出す楓香。

○畦道（夜）

月明かりが照らす静かな畦道。

疾走する楓香と廉人。

×

×

×

背後から楓香の服を掴む廉人の手。

襟口が引つ張られて首が絞まり、そのまま倒れ込む楓香。

廉人「結局捨てんなら初めから構うなよ！」

息を荒げ、馬乗りになる。

楓香「（強い目で睨みつけ）……！」

廉人「（睨み返し）……！」

暴れ出す楓香。

力尽くで押さえ付ける廉人。その目に涙が溜まっていく。

楓香「（暴れるのをやめ）……！」

廉人、力を緩めて目を逸らす。

が、その目が楓香の胸の膨らみを捉え、廉人「（ぽつりと）そっちが悪いんだから」

小刻みに震える手を楓香の胸元に伸ばすが、その瞬間、楓香の手が廉人の胸ぐらを掴み、グツと引き寄せる――

ガツツ 鈍い音を立てて重なる二人の唇。

楓香「（間近で目を見て）……好きにしたら？
こんなんで安心できるなら」

と廉人の服を離し、全身を地面に預ける。呆気にとられて固まる廉人。

と、楓香の唇から血が滲み出てくる。

廉人「（見つめ）……！」

震える指で楓香の唇に触れ、血を拭う。が、すぐにまた湧き出してくる鮮血……

廉人「……（目から涙が溢れる）」

何度も何度も楓香の唇をなぞる廉人。

楓香、赤く染まっただけでいく廉人の指を見て、

楓香「ああ、それ、私のなんだ……」

と廉人の頬にそっと触れ、涙を拭う。

堰を切って流れる廉人の涙……

楓香、両手で廉人の頬を包み込み、

楓香「……ごめんね」

と憐れみの笑みを浮かべる。

やりきれず叫び、逃げ出す廉人。

○中学校・体育館（夜）

暗い体育館に響くけたたましい警報音。

それをかき消さんばかりのピアノの音。

○同・ステージ（夜）

ピアノをかき鳴らす廉人。めちやくちや

に鍵盤を叩き、拳で殴りつけるなどする。

○拘置所・独房（夜）

就寝中の律子。眉間に皺が寄っている。

○刑場（律子の夢の中）

ピアノの不協和音が響き渡る刑場。

目隠しをされた一人の男が、首に赤い縄

をかけられる。

その様子を、分厚いガラスで仕切られた

部屋から見ている律子。

——ボタン！ 床が開き、男が落下する。

はっと目を背ける律子。

——バシヤン！

律子「？……（目を向ける）」

床の下は透明な液体で満たされており、

男の体はその中をゆっくりと沈んでいく。

それに伴い、じわじわと男の首に食い込

んでいく赤い縄……身悶え、口を開く男。

男「（口の動きで）おかあ……」

律子「（怪訝に見つめ）……！」

——ブツンッ！

赤い縄が切れ、不協和音が止んだ。

○中学校・体育館（夜）

月明かりが照らす、切れたピアノの弦。
放心状態で天井を仰ぎ見る廉人。

○拘置所・独房（夜）

目を覚まし、天井を見つめる律子。
『こんにちは赤ちゃん』の鼻歌をうたう。
その目に涙が溜まっていく。

○産婦人科・手術室（律子の回想）

無数の光を反射する、律子（32）の瞳。
その目から止め処なく溢れ出る涙……
『こんにちは赤ちゃん』のオルゴール音
が流れる中、助産師が皺くちやの赤子・
廉人（0）を律子と対面させる。

律子「ありがとうございます……」

と、その顔を医師が覗き込む。

医師「一安心ですね。時々あるんですが、赤ちゃんの首にヘソの緒が巻きついていました。おそらくそれで窒息して心拍が――」
オルゴール音が遠ざかり、律子の目から一切の光が消える。

○拘置所・独房（夜）

涙を拭い、静かに目を閉じる律子。

○警察署・内（未明）

出口前で署員に何度も頭を下げる誠一。
その様を他人事のように見ている廉人。

○同・駐車場（明け方）

警察署から出てくる誠一と廉人。
誠一、廉人の手に巻かれた包帯に血が滲んでいるのを見て、
誠一「ま―た派手に……痛いだろう？」
首を横に振る廉人。

誠一「ええ？ 見てるこつちが痛いぞ？」

廉人「ごめん」

誠一「いや……謝ることはないけどさ……」

廉人「……ごめんなさい」

涙が出てきて慌てて拭う。

誠一、前へ回り込み、両手を広げる。

廉人「？ ……いいよ、そういうの」

誠一「そうじゃないよ。(改めて両手をバツと広げ)かかって来い。ピアノ相手に喧嘩したってどうしようもないだろう」

廉人「(見つめ) ……」

誠一「来い」

廉人「…」

誠一「来い！」

廉人「… (目を伏せる)」

誠一「(へへと笑い)俺じゃダメか」

手を下ろして向き直り、車へ向かう。

その細く丸まった背中を見つめる廉人。

○拘置所・独房（早朝）

早朝の光を顔の半面に受けて机に向かう

律子。目の下にくまができています。

ノートを開き、日付を記す律子。直後、

一旦手を止め、小さく息をつく。

× × ×

ペンを走らせる律子。曰く、『——あなたが元気でさえいてくれれば——』

○原家・リビング（律子の回想）

ピアノを弾く幼い廉人。

隣で手拍子をしている律子。

律子の声（モノローグ）「——何もいらぬ。

そう何度言い聞かせても、あなたは『何が

欲しい？』って訊いてくるの。だからお母

さん、嬉しいやら困っちゃうやらで…。

そうやって貰ったものは全部、宝物にして

たんだけど、あの火事だね…。」

× × ×

ピアノを弾く12歳の廉人。

隣でその指を注視する律子。

律子の声（モノローグ）「——でも、あなたからの最後のプレゼント、お母さんのために作ってくれたあの曲だけは、頭の中で毎日繰り返し聴いてる」

弾き終え、隣を見上げる廉人。
微笑みかける律子。

律子の声（モノローグ）「——あれはあなたの
心そのものだから、誰にも奪えない、私だ
けの宝物……」

無邪気に笑い返す廉人。
が、その頬には涙が伝っている。

○拘置所・独房（早朝）

ペンを止め、先ほど記した最後の文字、
『私だけの宝物』をじっと見つめる律子。
やがてノートを閉じ、格子窓を見上げる。
——白い日の光に目が眩む。

○アパートの一室・台所（朝）

ごみ出しカレンダーを見る廉人。
視線の先には『不燃ごみ』の文字。

○アパート・外（朝）

アパート前のゴミ集積所。
カミソリやカッター、ハサミ、包丁など
が入った袋を置き、部屋へ戻る誠一。

○アパートの一室・居間（朝）

朝食をとる廉人と誠一。
廉人「サッパリと髭を剃った誠一を見て、
廉人「行くの？」

誠一「ん？ うん。何か甘いものでも差し入
れて、少し話して来ようかと思って」

廉人「……」
誠一「でもまあ、これで最後にするよ」
と皿を下げようと席を立つ。

廉人「（その背を見て）……俺も行く。渡した
いものあるから」

○走る車の中

運転席に誠一、助手席に廉人。
沈黙の車内……ラジオをつける誠一。
ラジオの音声「——明後日までに控訴の申し
立てがなければ死刑判決が確定と——」

ラジオを切る誠一。いっそうの沈黙……
廉人、窓の外を眺めつつ、

廉人「……学校になんか変な子がいて、」

誠一「？ 女の子？」

廉人「正直ちよつとウザいんだけど……」

誠一「だけど……？ 好き？ なのか？」

冷やかしの目でちらりと見る。

目を背ける廉人。その視線の先にサイド

ミラーに映る自分自身が。

廉人「……なんか似てて。見てて嫌んなる」

誠一、黙って片手をハンドルから離し、

廉人の肩にポンと置く。

廉人「……別々でもいい？ 今日」

○拘置所・廊下

長椅子に座る廉人。傍らに紙袋。

目の前のドアが開き、誠一が出てくる。

誠一、廉人の隣に座って俯き苦笑する。

廉人「(不憫に見て)……」

○同・面会室

真つすぐにこちらへ向けられる、憂いと

優しさが入り混じった律子の眼差し。

それを受ける廉人はどこか遠い目。律子

の顔はぼやけて見え、背景の鉄のドアに

ピントが合っている。

廉人「……こういうところって、誕生日とか、

何かいいことあるの？」

律子「(パツと明るく)覚えててくれたの？」

頷く廉人。

律子「それが何よりよー。あなたがこうして

元気な顔見せてくれて」

廉人「(ぼつりと)元氣……」

律子「けど学校は？」

廉人「(小首を傾げ)停学、っていうか……」

律子「え？ どうして？」

廉人「(目を伏せ)……」

律子「もしかしてお母さんのことで？ 人か

ら何言われても気にしちやダメだよ？」

廉人「人は関係ないよ」

律子「(気を揉み)……。留学準備は？　ちゃ
んと進んでるんでしょ？」

廉人「……：……行かないよ」

律子「え？」

廉人「ドイツへは行かない」

律子「だからお母さんは平気だって」

廉人「ここへも来ない」

しばし無言で見合う二人……：追いつくよ
うな律子の目、強く拒絶する廉人の目。

律子「……廉人？　お母さんは本当にあなた
のためなら」

ガサツ　律子の言葉を遮り、床に置いて
いた紙袋を取り上げる廉人。

律子、包帯の巻かれた廉人の手を見て、

律子「手……」

廉人、紙袋からトロフィーを取り出し、

廉人「おめでどう」

律子「……」

ゴト　律子の眼前に置かれるトロフィー。

廉人「おめでどうございました」

律子「……(困惑の笑みを浮かべ)廉人？」

廉人、無言で席を立ち、出口へ向かう。

律子「(焦燥し)ちよつと廉人！　廉人！」

振り向かずドアを開ける廉人。

律子「(絶叫し)廉人！」

○同・廊下

ドアから出てくる廉人。

何事かと見る誠一。

律子の声「廉人！　廉人！　廉人！」

ワーと叫び、駆け出す廉人。

○同・外

制止を振り切り、門を飛び出す廉人。

○雑踏(夕方)

車の音や人の声などノイズの多い大通り。

過呼吸を起こして朦朧としながらも、ひ

たすら走り続ける廉人。

律子の声「廉人！　廉人！　廉人！……」

逃げれば逃げるほど脳内に響く母の声。

○拘置所・独房（夜）

消灯後の独房。

満月の光を頼りにノートを綴る律子。

『――だからお母さんはあなたのために』
そこでペンが止まる。

顔を上げ、茫然と壁のシミを見る律子。
次第にそれが人影のように見えてくる。

律子「（優しく微笑みかけ）――死ぬのよ？

お母さん、あなたのために」

と、チラッ 扉の小窓から懐中電灯の光
が射し、人影は瞬時にただのシミと化す。

刑務官の声「眠れませんか？」

律子「（光に顔をしかめ）……」

しばしの後、独房内に闇が戻り、人の足
音が遠ざかっていく。

再びペンを動かす律子。

グリグリグリグリ…… 黒く塗り潰され
ていくノート――暗転。

○同・面会室

キィ…… 奥のドアが開く。

律子が入室し、明るい顔で会釈する。

× × ×

接見中の内山と律子。

内山「わかりました。では早急に控訴の手続
きに入ります」

律子「お願いします（頭を下げる）」

内山「……でも、どうして今喋ろうと？」

律子「いけませんか？」

内山「いえ。ただ、これまでは息子さんに負
担をかけたくないと……」

律子「先生？ 私どのみち死刑ですよね？」

内山「（複雑な目を向け）……」

律子「だからあの子に伝えてあげたいんです。

「私は、私だけは、死んでもずっとあなた
の味方、あなたの幸せだけを願ってる”つ
て、公の場で、はっきり。そうでもしなき
やあの子、いつか潰れちゃうから……」

内山「(引き)……」

律子「前に私、失礼なこと言いましたよね？あれ、同族嫌悪みたいなものなんです」

内山「(怪訝に)？」

律子「私も、子供は持たないつもりでした」
内山「……」

律子「お腹の中に新しい命があるって知った時、私泣いたんです。『ああ、自分の人生終わっちゃった』って」

微かに揺れる内山の瞳。

律子「でも、実際に産んで育ててみて、そりゃ本当に自分の時間なんてなくなりましてけど、あの子がただ目の前で笑ってくれるだけで、心の隙間が全部、一瞬にして満たされて……。そんな毎日の繰り返しの中で、やっとわかったんです——」

○高等裁判所・法廷

証言台に立つ律子。

律子「——私は心の奥でずーっとこの子を待っていたんだって。それまでは、何かを手に入れては飽き、次の何かを欲するばかりの人生でした。神様に与えられて初めて、本当に欲しいものを知ったんです」

澄んだ目で真っすぐ前を見る律子。
カタカタカタカタ…… その背後で何か
が小刻みに揺れる音がする。

律子「あの子は私の全て……いえ、それ以上です。だから、あの子の人生だけは誰にも邪魔させたくありませんでした。私が守らなかつたら他に誰があの子をと——」

——ボタン！

律子「(傍聴席を見向き)！」

ガタガタガタガタ…… 廉人が床に倒れ
痙攣を起こしている。

律子「廉人！」

取り乱し、柵を越えようとする。

取り押さえる刑務官ら。

ざわつく法廷内。

裁判長「えー、一時休廷します。(書記官に)

救護の要請を」

傍聴席では、誠一が床に這いつくばって必死に呼びかけている。

誠一「(頬を叩きながら) 廉人！ 廉人！ しつかりしろ、おい？」

柵の手前で暴れる律子。

律子「廉人！ 廉人！ 廉人！」

居た堪れない目で見える内山。

裁判長「被告人は一旦退廷を」

刑務官らに両脇を抱えられる律子。

奥のドアへと引きずられていく。

律子「廉人！ お願いこつち見て、廉人！」

ドアの向こうへ吸い込まれていく律子。

○救急病院・病室（夕方）

ベッドの上で目覚める廉人。

安堵した誠一の顔が目に入る。

誠一「よかったな。何ともないって」

廉人「……」

誠一「(肩をポンポンと叩き) よかった。お父さんちよつと弁護士さんに連絡してくるとベッドを離れる。」

廉人「……よくないよ。何ともないものをどうやって治せって言うんだよ……！」

背を向けたまま立ち止まる誠一。

○高等裁判所・法廷

傍聴席から誠一の背中を見ている廉人。

証言台の誠一に内山が尋問をしている。

内山「妻である被告人に対して暴力を振るったことはありますか？」

誠一「一度か二度は、近いことがあったかもしれないません」

内山「近いこと、とは具体的に？」

誠一「こう……(手で再現し) 妻の髪を掴んで、頭を激しく上下させたりといった」

被告人席の律子は無表情である。

内山「そういったことを、はっきり暴力とは認識せずになさっていたのですか？」

誠一「いえ。やり過ぎているという自覚はあ

りました。ただ、妻に挑発的な態度をとられてついと言いますか……。彼女や息子のために、自分が外でどれだけ頭を下げて頑張っているのか、そのところを、妻には少しでも理解してほしかったんです」

尚も無表情の律子。

内山「息子さんに対してはいかがでしたか？」

誠一「息子に対しては、とても大人しい子でしたので、手を上げたことはありません」

内山「では、言葉で何か圧力をかけたりといったことは？ 特に、息子さんの将来の夢のことなどで」

誠一「あつたかもしれませんが」

内山「具体的にはどういった？」

誠一「〃お前はどうしたいんだ？〃と少々きつい口調で訊ねたら、息子が黙ってしまったので、〃男だろう、しっかりしろ。だからお母さんの人形になるんだよ〃といったことを口走ってしまったことは……」

内山「人形」

ギロツと動く律子の目。

誠一「すみません、人形というのは、私の勝手なあれなんですけど、」

内山「いえ、その件は結構です。……それでつまり、父親である証人が息子さんに対してそのように圧力をかけたことで、息子さんは夢を追う自由を奪われてしまった、ということの間違いないでしょうか？」

律子、誠一に目を向ける。

誠一「……はい。少なくとも妻はそう感じ、絶望していたと思います」

内山「最後に伺います。そのような問題に際して、被告人は証人に何度か離婚を申し立てたということですが、証人がそれに取り合わなかったのはなぜですか？」

誠一「子供のため……と確か当時の私は言っただかと思いますが、今思えば、妻に再三指摘された通り、私自身のためでした。自分の社会的地位を守りたかったからです」

律子を見る誠一。二人の目が合う。

誠一「——でもそれ以上に、ただ純粹に、ここに
いる妻と息子を、私は決して失いたく
なかった。今もその想いは変わりません」
律子、しばし複雑な目で見た後、顔を背
ける。

微かに肩を落とす誠一。しかしすぐに背
筋を正して前を向き、

誠一「元来自由な人間だった妻に窮屈な思い
をさせ、ここまで追い詰めてしまったのは、
他でもなく、夫である私の責任です。この
先、私の人生の全てをかけて、妻と共に罪
を償っていききたいと——」

父の背をじっと見つめる廉人。
その廉人の横顔を見つめる律子。

○同・待合室

座って待機する廉人。張り詰めた表情。
カチャッ ドアが開き、ペットボトルの
お茶を持った内山が入ってくる。

内山「(差し出し) はい。よかったです」

廉人「ありがとうございます」

お茶を飲む廉人。かなりのペースである。

内山「……本当に、大丈夫？」

廉人「はい」

またお茶を飲む。直後、少し咽る。

内山、遠慮がちに廉人の背中をさすり、
内山「辛かったら、書面で対応してもらって、
後で私が代わりに」

廉人「(遮り) やめてください。(俯き) ……
母みたいなこと、言わないでください」

内山、廉人の背中から手を離す。

廉人「……あと、あれも要らないです」

○同・法廷

パーテーションを撤去する職員達。

傍聴席最前列の通路寄りに廉人、その隣
に誠一が座っている。

裁判長「それでは証人尋問を始めます。証人
は前に出てください」
すっと席を立つ廉人。

× × ×

証言台に立ち、宣誓書を読み上げる廉人。
廉人「良心に従って真実を述べ、何事も隠さず、偽りを述べないことを誓います」

被告人席の律子は下を向いている。

裁判長「宣誓をした上で嘘をつくとは偽証罪に問われることがありますので、本当のことを述べてください」

廉人「はい」

裁判長「それでは着席してください。弁護人は尋問を始めてください」

静かに腰を下ろす廉人。

内山「始めます。まず、証人は、(律子を指し)

ここにいる被告人・原律子のご長男ということの間違いないでしょうか？」

廉人「はい。間違いありません」

内山「では、事件以前の家庭内の事情について伺います。お母さんが、お父さんから叱責を受けるなどして悩んでいる姿を、証人は目撃したことがありますか？」

廉人「何度かは……」

内山「その際、お母さんは証人に、何か愚痴をこぼしたり、弱音を吐いたりといったことはありましたか？」

廉人「……自分のことで、辛いとか、苦しいとか、そういうことを僕に話したことはなかったです」

内山「では、今度は証人ご自身のことについて伺います。お父さんの圧力によって自分の夢が潰されてしまったという認識は、あなた自身にもありましたか？」

廉人「わかりません」

内山「……わからないというのは、それほどの圧力であったかどうかの判断をしかねるということでしょうか？」

廉人「(目を伏せ)……僕の……、僕の、夢だったかどうかです」

廉人を見る律子。

その視線を感じ、硬直する廉人。サーツと血の気が引き、息が上がっていく。

内山「(少々困惑しつつ)しかしいづれにしても、被告人にとって大事な一人息子である証人が当時懸命に目指していた音楽の道がお父さんによって――」

廉人「(被せて) 僕が、」

内山「(喋るのをやめ)？」

廉人「僕が――」

呼吸が急激に速くなる。

内山「えー、お母さんと二人三脚で目指していた音楽家になるという夢が、お父さんの非協力的な態度によって無下にされてしまった。そのことについて――」

激しく息をする廉人。とても喋れる状態ではなさそうだ。

傍聴席の誠一、見ていられず、柵に手をかける。

律子「(内山に) もういいです、やめてください」

内山「(被せ) 裁判長、一時休廷を願います」

裁判長「検察官、いかがですか？」

検察官「然るべく」

裁判長「では――」

と、ガタン！

皆の視線が証言台に集まる。

廉人が立ち上がり、椅子が倒れている。

律子「(見上げ) ……」

息を整えようと深く呼吸する廉人。

息を呑んでその背を見守る誠一。

廉人「…：僕がやりました」

律子「！」

内山「！ …：裁判長、休廷を」

裁判長「(制し) 証人、何ですか？」

廉人「(顔を上げ) 僕がやりました。(律子を

一瞥し) この人は何もしていません」

律子「(狼狽し) 違う、違います、違うんです！

この子は優しい子だから…：！」

立ち上がり裁判長に詰め寄ろうとする。

すかさず取り押さえる刑務官ら。

なすすべもなく見ている内山。

柵を滑り落ちる誠一の手。

裁判長「被告人は着席を」

律子「違うんです！ 昔から本当に、私がい
ないとダメな子で……」

廉人「僕がやりました」

律子「(裁判長に懇願の目を向け)違うんです、
私を庇おうと……！」

廉人「僕がやりました」

律子「(怒鳴る) 廉人！」

廉人「(負けじと声を張り) 僕がやりました」

裁判官、検察官、内山のそれぞれが顔を
見合わせ困惑している。

裁判長「証人、僕がやりましたというのは、
つまり……」

律子「(目を血走らせ) 優しい子なんです！」

と裁判長を威圧し、刑務官の制止を振り
切って廉人に縋りつく。

律子「お願いだからもうそんな嘘……」

廉人「(裁判長に)はい。僕が三人殺しました」

律子「廉人！」

と手を上げようとする。

が、その手を刑務官に掴まれ、そのまま
両腕を固められる。

律子「優しい、優しい子なんです……(廉人
に)ねえ？ ほら、小っちゃい頃もよく」

廉人「(醒めた目で見て) 証明します」

——一気に律子の首を絞め上げる。

律子「(声を絞り) や、さ、し、い、こ……」

その紅潮した顔に浮かぶ恍惚の笑み……
異様な光景に啞然とする面々。

が、すぐに刑務官らが止めに入る。

誠一も柵を乗り越え加勢し、律子と廉人
を引き離す。

裁判長「一時休廷。証人は直ちに退廷を」

刑務官の一人が裁判長に視線を向ける。

裁判長、咳払いし、自身の右後ろにある
ドアを目で示す。

そちらへ連行されていく廉人。

律子、震える手で首元をさすり、

律子「今……、今死ねたら幸せだった……」
立ち止まる廉人。

律子「廉人には二度と触れないと思ってた。

拷問だったよ、お母さんには。死刑がもう、ご褒美に思えるくらい（と笑う）」

廉人、硬直し、ぐっと拳を握る。

律子、その手の甲に浮き立つ血管を見て、律子「けど、ちよつとの間に随分遅しくなつて……」

廉人「（見向き）……」

律子「背もだいぶ……（悲しげに微笑み）もう越されちゃったかな？」

複雑な視線を向ける廉人。

律子「……あなたは昔、託児所に預ける時、小っちゃい手でお母さんにしがみついて、泣いて泣いてしょうがなくなつて……。で、ごめんね、ごめんね、つて、お母さん出てくんだけど、泣き声だけは物凄くつて、外の道へ出てはまだ聞こえて……」

廉人、目を背け、自ら出口へ向かう。

律子「だから……、だからお母さん、胸が引き裂かれるようで、苦しくて、苦しくて、苦しくて、苦しくて……、嬉しかった」

ドアを目前にして足を止める廉人。

律子「……嬉しかったの」

廉人「（見向き）……」

律子「お母さんは、……私は、廉人をそうやって一生泣かせときたかった。あなたのために死ねば、お墓の中でずーっとその泣き声を聞いていられる、そう思ってた」

廉人「（見つめ）……」

律子「でも、あんたはもう、泣かないね」

廉人の喉仏がゴクリと動く。

その喉元を見つめ、静かに涙する律子。刑務官らに引っ張られ、ドアの向こうへ消えていく廉人。

○アパート前の道（朝）

多くのマスクミが群がるアパート。

少し離れた所に黒い車が停まっている。

○車の中（朝）

アパートの一室を見張る二人の刑事。

と、その部屋の遮光カーテンが開く。

○アパートの一室・居間（朝）

台所からトーストを運んでくる誠一。

窓際に立つ廉人が振り向き、

廉人「日当たり、悪くなかったんだね」

誠一「（眩しさに目を細め）……」

○テレビ画面（朝）

マスコミでゴった返す高等裁判所前。

リポーター「様々な面で注目を集めている、

三人の犠牲者を出した薬物混入甘酒事件の

第二審ですが、本日ついに判決が――」

○アパートの一室・居間（朝）

誠一、テレビを見ながら、

誠一「どうする？ お父さんは行くけど」

廉人「俺は……学校行きたい」

誠一「ん、そうか」

朝食を食べ終え、席を立とうとする。

廉人「あ、俺やる」

と立ち上がる。

○同・台所（朝）

スプーンでかき混ぜられる黒い渦。

○同・居間（朝）

廉人、誠一にコーヒークップを渡し、

廉人「ブラックでよかったよね？」

誠一「（頷いて受け取り）……しかしブラック

過ぎないか、これ？」

廉人「そう？」

と自分の分を一口飲んで咽る。

誠一「（笑い）お子ちゃまだなー」

と余裕を見せつつ一口飲んで咽る。

笑い合う二人。

○同・玄関（朝）

学ラン姿の廉人が靴を履いている。

ズボンの裾が短く、足首が見えている。

それを見つめる誠一。

廉人「(靴を履き終え、見向き) じゃあ……」

誠一「(ぎこちなく) おう」

ドアを出ようとする廉人。

誠一「廉人、」

振り向く廉人。

誠一「……お前自身の動機って……」

廉人「……」

誠一「や、いい、いい。話したくなければ」

廉人「(俯き) 俺はただ……、ただあの人達が

……(おずおずと顔を上げ) あの人達や、

お父さんがいなければ、お母さんはもう泣

かなくて済むと思っただから……」

誠一、俯き、押し黙る。

廉人「……ごめ」

ズン 廉人の頭に手を乗せる誠一。

廉人「(頭を垂れ) ごめんなさい……」

その目から大粒の涙が落下する。

誠一、廉人の頭をぶつきらぼうに撫で、

誠一「ここからは、自分のために生きなさい」

廉人「(顔を上げ) ……いつてきます」

背を向け、ドアに手をかける。

○拘置所・面会室

ギイ…… 鉄のドアが開く。

律子が入室し、心許ない顔で会釈する。

×

×

×

接見中の律子と内山。

律子「教唆……殺人教唆でしたっけ？ 私、

そのくらいにはなりますか」

内山「(資料に目を落とす) 『お父さん、あの

人達が怖くてあなたの夢を潰そうとしてる

のね』——この言葉で『人を殺しなさい』

と命令されたと思いますか？」

律子「でも先生、あの子は当時ほんの子供だ

ったんですよ？ 私はあの子の母親です。

全部私の責任です。だからせめて……」

懇願の目を向ける律子。

内山「……わからないわけじゃないんです。

わかり過ぎるくらいです。あなたのその、

痛みも、狡さも」

律子「(怪訝に)？」

内山「手元の資料を静かに閉じ、

内山「いましたから、私にも」

律子「……？」

内山「私は確かに、子供が全てなんてタイプではありませんでした。でも、失くしたら何もかもが無意味になりました」

律子、言葉が見つからず目を泳がせる。

内山「臨終に際して神に祈りましたよ、そんなもの微塵も信じてなかったくせに。〃この子の命を奪うつもりなら、お願いだから一秒でも先に私を殺してください”って」

居た堪れない目で見つめる律子。

内山「利己的ですよね？ 引き換えに、とかではなかった。ただもう、あの子のいない人生を一秒でも生きることが、死ぬことよりずっと恐ろしかった」

律子「私……ごめんなさい……」

内山「でも結局、そういう一秒を、もうどれだけ生きたかわかりません。育児そつちのけで拘ってたこの仕事も、それからただ惰性で……」

淡々と語る内山の頬をツ―と涙が伝う。

律子、その頬を撫でるようにアクリル板に手をかざす。

内山「もし神様がいるとしたら、これは身勝手な私に対する罰なのだと考えてみたりもしました。……けど、あなたを見ていて確信しました。やっぱり神なんていない」

――ドンッ！ 拳をテーブルに叩きつけ、

内山「不公平も甚だしい！」

圧倒され、固まる律子。

内山「……裁かれないのが、せいぜいの罰ではないですか。あなたにとっては」

律子「(充血した目で見て)……」

アクリル板を滑り落ちる律子の手。

○高等裁判所・廊下

薄暗く静まり返った廊下。

手錠と腰縄をされた律子が、刑務官に連れられ歩いている。

○中学校・渡り廊下

昼休み。生徒達が行き交う渡り廊下。人目も気にせず、一人颯爽と歩く廉人。

○高等裁判所・法廷

入廷し、手錠と腰縄を解かれる律子。傍聴席で見守っている誠一。律子、全体を見回してから誠一を見る。神妙な顔で応じ、頷く誠一。寂しげに微笑し、頷き返す律子。

○中学校・体育館

床に転がるバスケットボールを拾う廉人。楓香が校庭側の扉にもたれて立ち、その様子を見守っている。廉人、ボールをゴールへ向かって放る。スパツ… 呆気なく入った。

楓香「！」

扉から背を離し、拍手を送ろうとする。が、茫然と立ち尽くす廉人を見てやめる。と、仲間とバスケをしていた裕翔がその楓香の様子を見て——
ボンッ！ 廉人にボールをぶつけてきた。

廉人「（見向き）！」

裕翔「過疎ってるからさ、一人足んないんだよね、ちようど」

× × ×
バスケをする廉人と他の生徒達。軽々と得点を重ねる裕翔とは対照的に、上手く立ち回れず右往左往している廉人。キュッキュ、キュッキュ… シューズの音が響いている。

○同・ステージ

誰もいないステージ。微細な埃がチラチラと舞い、窓から射す光の軌道を示している。行き着く先には、

グラランドピアノの切れた弦が――

○高等裁判所・法廷

証言台に立ち、目を瞑っている律子。

――もう何も聴こえない。

律子「私の罪は……（目を開き）私の罪は、あの子に、私以上に私の人生を生きさせようとしたことです」

裁判長「被告人は質問に答えてください」

律子「……（前を見て）はい。事件を起こしたのは、私ではなく――」

○中学校・体育館

――スッ 宙を切るバスケットボール。

裕翔の声「廉人！」

パスを受け取ろうと身構える廉人。

が、トンッ！ トトトト……

ボールは廉人の指を突いて床に落ちた。

廉人「（手を見つめ）……」

その様子を遠巻きに見ている楓香。

廉人に駆け寄るバスケット仲間達。

裕翔「大丈夫か？（と顔を覗き込む）」

廉人「（俯いたまま）いっ……」

裕翔「ごめん、俺」

廉人「（顔を上げ、パッと笑い）いっつてええ
――っ！！」

と腫れた人差し指を立てて駆け出す。

ポカンと見送る裕翔ら。

廉人の視線の先には楓香が立っている。

○高等裁判所・法廷

唇を噛みしめて立つ律子。

裁判長「――主文、被告人は無罪」

目を伏せる律子。唇に血が滲む。

と、バタバタバタッ！

傍聴席から一斉に駆け出していく報道陣。

先頭の男がドアに手をかける。

○中学校・体育館

ガラッ 楓香の背後の扉が開く。

バツとなだれ込む白昼の光。

決勝ゴールを決めた選手さながらに指を立てて駆けて来る廉人。

楓香「(微笑み) おめでとう」

廉人、足を止め、

廉人「ありがとう」

視線の先にはパトランプの赤い光が…

○アスファルト

回り始める車輪。

○走る車の中

助手席の律子がバックミラーを見ている。

映っているのは市役所の看板である。

律子「すいませんでした。ただでさえあれなのに、ちゃっかり」

隣で運転している内山。

内山「ほんとですよ。暇じゃないんですから」

律子「…」

内山「(無表情で) 冗談です」

苦笑する律子。

内山「にしても、また二人でやり直すという道もあつたんじゃないですか？」

律子「…私、一度ちゃんと、一人で立たない」と

内山「…(ふっと笑う)」

律子「…」

内山「ごめんなさい。私も昔、同じようなことを言っただけです」

とタバコに手を伸ばしかけるが、はっとして引く。

律子「あ、お気遣いなく。私も昔は割と」

内山「…じゃあ失礼して」

と窓を少し開け、タバコに火を点ける。風が勢いよく入ってきて二人の髪を乱す。

内山「すいません」

と窓の開きを調整する。

律子「ああ…気持ちよかったのに」

と笑いかける。と、内山の髪の毛の根本が所々黒くなっていることに気づく。

内山「(タバコを一吸いし)でも……、最近少しわかってきたんです。本当に強い人は、誰と居ても一人で立ってる」

律子「……」

内山「(煙を吐きながらボソッと)一人にならなきゃ一人で立てないようじゃ、結局まだまだ子供なんです」

律子「子供……」

内山、慌てて煙を払い、

内山「いえ、今のはあくまで自分自身に……」

気まずそうにまたタバコを吸う。

律子「……子供。子供、子供、子供ですよーだ(と笑う)」

内山「……(クククと笑い出す)」

その鼻からポッポッと煙が漏れる。

思春期の少女のようにケラケラ笑う二人。

律子、ひとしきり笑った後に深呼吸し、

律子「……懐かしい」

○川沿いの道

停まる車。

○車の中

内山から新しい鍵を受け取る律子。

律子「本当に、お世話になりました」と車を降りようとする。

内山「あ、ちよつと、」

律子「(見向き)?」

内山「こんなんであれですけど、餞別に」

タバコとライターを差し出す。

律子「……(笑い)ありがたく」

受け取り、ドアを出す。

○アパート・外階段

段を数えながら外階段を上る律子。

律子「――10、11、12、13、……14」

上りきり、顧みる律子。

○同・2階外廊下

外廊下を歩く律子。

その視界に入る大きな河川。
ある部屋の前で立ち止まり、ポケットか
ら鍵を出す律子。が、それをしまつて、
代わりにタバコとライターを取り出す。

○河川敷（律子の視点）

手を繋いで河原を歩く母子。

○アパート・2階外廊下

河原を眺めながらタバコを吸う律子。
その頬をツーと涙が伝う。

○河川敷（律子の視点）

子がふいに何かに気を取られて母の手を
離し、タタタと駆け出す。

母「ちよつとユウ、そつちじゃないよー」
無邪気に走り続ける子供。
みるみる開いていく二人の距離。

○アパート・2階外廊下

じりじりと伸びるタバコの灰。

○河川敷（律子の視点）

母「ユウ、ユウ、もう……」
一息ついて諦め、その場で見守る。

○アパート・2階外廊下

ホロツ……長い灰が落ちる。
律子、短くなったタバコを最後に一吸い
し、口をすぼめてホツと息を吐く。
——曇天に昇りゆく、いびつな煙の輪。

〈了〉